



学校だより

調布市立調和小学校
令和8年2月20日(金)
校長 安藤 力也

HP: <http://www.chofu-schools.jp/chowa-sho> Mail: chowa-sho@chofu-schools.jp

令和7年度 学校生活 児童・保護者アンケートのまとめ

令和7年度学校生活保護者アンケートに御協力いただき、誠にありがとうございました。結果を学校運営協議会にて確認・検討し、以下のようによまとめましたのでお知らせいたします。

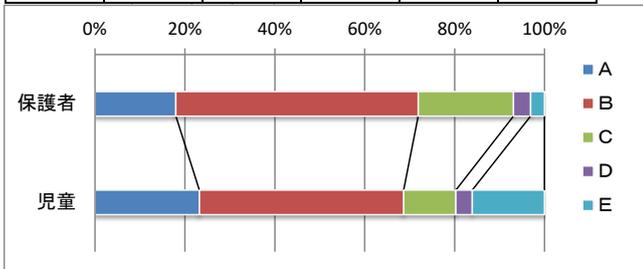
【実施日】 保護者:令和7年12月 8日~14日 方法:在籍児童ごとWebによる回答 回答数345(回収率56.4%)

児童:令和7年12月12日~25日 方法:全学年Webによる回答 児童数612名

	A	B	C	D	E
とてもそう思う					
そう思う					
あまりそう思わない					
そう思わない					
分からない					

1 (保護者) 子どもは、すすんであいさつをしている。
(児童) わたしは、すすんであいさつをしようとしている。

	A	B	C	D	E
保護者	18.0%	53.9%	21.2%	3.8%	3.1%
児童	23.2%	45.4%	11.6%	3.6%	16.1%



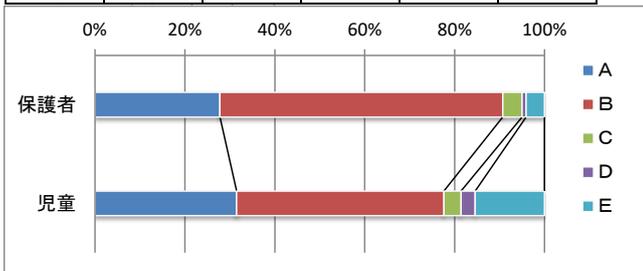
肯定的意見(A・B)の割合を見ると、保護者は71.9%、児童は68.7%という結果となった。児童の回答では、C~Eが31.3%と比較的高く、一定数の児童が「あいさつをすすんで行っていない」と自己評価していることが明らかとなった。特に、あいさつが「言われればできる」場面によって差があるなど、行動が定着段階に至っていない児童の存在が示唆される。

学年別に見ると、低学年・中高学年ともに肯定的な回答が多いものの、中高学年において成長とともに人間関係や場面が多様化する中で、あいさつの必要性や意味を十分に実感できていない児童がいる可能性が考えられる。

これらの結果から、今後は教職員の取組を継続するとともに、「なぜあいさつが大切なのか」「自分からあいさつすることで何が生まれるのか」といった価値を、児童自身が実感できる指導の工夫が求められる。また、学校での取組や子どもたちの変容を、保護者にも発信し、家庭と連携してあいさつの定着を図ることが重要である。

2 (保護者) 子どもは、異学年交流(たてわり班)活動や道徳教育や体験的活動等を通して、豊かな心が育っている。
(児童) わたしは、友達やまわりの人を大切に、思いやりの心をもって生活しようとしている。

	A	B	C	D	E
保護者	27.8%	62.9%	4.3%	0.9%	4.1%
児童	31.5%	46.1%	3.8%	3.2%	15.4%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において90.7%と高い評価となっており、学校の教育活動を通して、子どもたちの思いやりの心が育っていると受け止められていることが分かる。

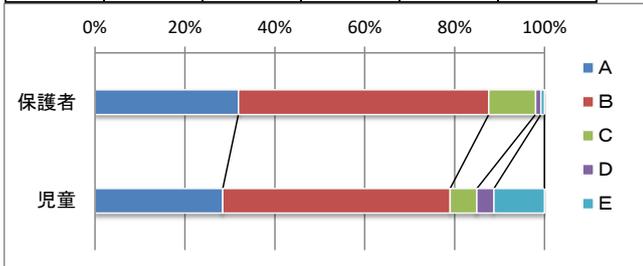
一方、児童の肯定的意見は77.6%と、保護者と比べるとやや低い結果となった。特に、児童の回答ではEが15.4%と一定の割合を占めており、「思いやりをもって生活しようとしている」と実感できていない児童が一定数存在することがうかがえる。このことから、取組自体は充実しているものの、児童一人一人が自分の行動や成長を肯定的に捉えきれない可能性が考えられる。

学年別に見ると、低学年・中高学年ともに肯定的な回答が多いものの、中高学年においてはC~Eの回答が見られる。人間関係がより複雑になる中高学年では、思いやりのある行動が求められる場面が増え、自身の行動を厳しく振り返る傾向が影響しているとも考えられる。

今後は、異学年交流や道徳教育、体験的活動を引き続き充実させるとともに、児童が「自分は人を大切にできている」「思いやりのある行動ができた」と実感できるよう、具体的な行動を認め、価値付ける場面を意図的に設定していくことが重要である。また、こうした成長の姿を家庭とも共有し、学校・家庭が連携して豊かな心の育成を一層推進していきたい。

3 (保護者) 子どもは、きまりを守り、基本的な生活習慣を身に付けて生活している。
(児童) わたしは、きまりを守って生活しようとしている。

	A	B	C	D	E
保護者	31.9%	55.7%	10.4%	1.2%	0.8%
児童	28.4%	50.6%	6.0%	3.8%	11.2%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において87.6%と高い評価となっており、家庭から見ても、子どもたちが一定程度きまりを守り、生活している姿がうかがえる。

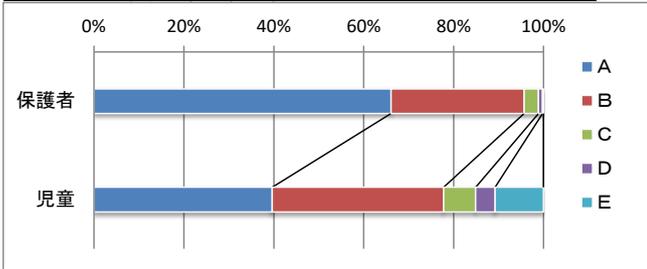
一方、児童の肯定的意見は79.0%と、保護者に比べるとやや低い結果となった。特に、児童の回答ではC~Eが21%と一定数見られ、この結果から、きまりを守る行動が場面によって安定していない、あるいは自己評価が厳しくなっている実態が推察される。

学年別に見ると、低学年・中高学年ともに肯定的な回答が多いものの、学年が上がるにつれて活動範囲や人間関係が広がり、きまりを意識しながら行動する場面が増えることが、自己評価の厳しさにつながっている可能性が考えられる。

今後は、きまりや基本的な生活習慣について、繰り返し指導を行うとともに、「守られている姿」を具体的に認め、評価することで、児童が自信をもって行動できるよう支援していくことが重要である。また、家庭との連携を一層深め、学校と家庭が同じ視点で生活習慣の定着を図っていく必要がある。

4 (保護者) 子どもは、スポーツフェスティバルや音楽会等の学校行事では目標をもって取り組んでいる。
 (児童) わたしは、スポーツフェスティバルや音楽会など、学校の行事では自分なりに目標をもって取り組んでいる。

	A	B	C	D	E
保護者	66.1%	29.6%	3.2%	0.9%	0.2%
児童	39.6%	38.1%	7.1%	4.3%	10.8%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者が95.7%と非常に高く、学校行事が子どもたちの目標意識や成長につながるよう、計画的かつ意図的に取り組まれていることが高く評価されている。一方、児童の肯定的意見は77.8%にとどまり、保護者との間に一定の認識の差が見られた。

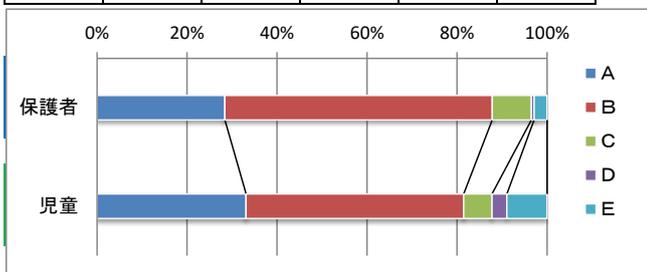
児童の回答では、77.8%が肯定的ではあるものの、C～Eが22.2%と比較的高いことから、行事に参加はしているものの、「自分なりの目標をもって取り組めた」という実感を十分にもっていない児童が一定数いることがうかがえる。目標の意味を十分に理解しないまま活動に臨んでいる可能性も考えられる。

学年別に見ると、肯定的な回答が多いものの、中高学年においてもC～Eの回答が一定数見られる。行事の内容が高度化・多様化するにつれ、役割や責任が増え、達成感よりも難しさを強く感じる児童がいることも要因の一つと考えられる。

今後は、行事の事前段階で児童一人一人が「自分にとっての目標」を明確にもてるよう支援するとともに、活動の途中や振り返りの場面で達成感や成長を実感できる工夫が求められる。また、児童の目標や努力の過程を可視化し、家庭と共有することで、学校行事がより主体的な学びと成長の場となるよう改善を図っていきたい。

5 (保護者) 子どもは、授業の内容をよく理解している。
 (児童) わたしは、学校の授業がよくわかる。

	A	B	C	D	E
保護者	28.4%	59.4%	8.7%	0.6%	2.9%
児童	33.1%	48.3%	6.3%	3.3%	8.9%



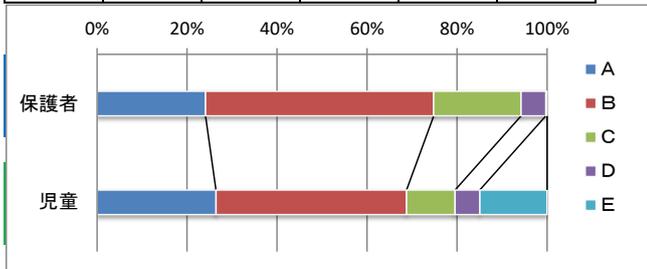
肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において87.8%と高い評価となっており、家庭から見ても、授業内容の理解が概ね図られていることがうかがえる。

一方、児童の肯定的意見は81.5%と、保護者と比べるとやや低い結果となった。児童の回答では、C～Eが約18%見られ、特にEが8.9%と一定数存在していることから、「授業がよく分かる」と実感できていない児童がいることが明らかとなった。学習内容の難易度や学習の進度、個々の理解の差が影響している可能性が考えられる。肯定的な回答が多いものの、学年が上がるにつれて学習内容が抽象的・高度になることに加え、「分かったつもり」と「本当に理解している」との差を、児童自身が意識するようになることが、自己評価の厳しさにつながっているとも考えられる。

今後は、これまでの授業改善の取組を継続するとともに、つまづきに応じた支援や指導の工夫を一層充実させていくことが重要である。また、分かったことやできるようになったことを実感できる振り返りの場を設定し、児童の学習への自信を高めることで、「分かる授業」の実感をさらに高めていきたい。

6 (保護者) 子どもは、すすんで学習に取り組んでいる。
 (児童) わたしは、すすんで学習しようとしている。

	A	B	C	D	E
保護者	24.1%	50.7%	19.4%	5.5%	0.3%
児童	26.4%	42.4%	10.8%	5.5%	15.0%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者は74.8%、児童は68.8%という結果となっており、学習意欲に対する受け止め方に差が見られる。

児童の回答では、C～Eが約31%を占め、特にEが15.0%と比較的高いことから、「すすんで学習している」と自覚できていない児童が一定数存在することが分かる。学習内容の難しさや学習方法への不安、学習への見通しのもちにくさなどが、意欲の低下につながっている可能性が考えられる。

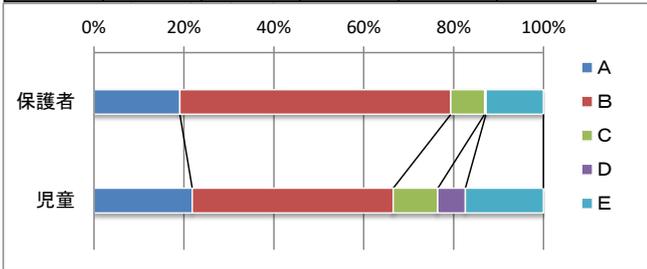
保護者の回答においても、C・Dが約25%見られ、家庭からは「取り組んでいるが、主体的とはいき切れない」と受け止められている状況がうかがえる。宿題や家庭学習が受動的になっているケースも背景にあると推察される。

学年別に見ると、肯定的な回答が多いものの、中高学年では、学習内容の高度化に伴い、学習への苦手意識や達成感の得にくさが影響している可能性がある。

今後は、児童が学習の見通しをもって取り組めるよう、目標設定や振り返りを重視した授業づくりを一層推進するとともに、「分かった」「できた」という達成感を積み重ねる支援が重要である。また、家庭と連携し、学習の進め方や頑張りを共有することで、児童の学習意欲を学校・家庭の両面から高めていきたい。

7 (保護者) 学校は、ICT機器の活用や子ども同士の学び合いを推進するなど、主体的な学びの実現に向けた授業づくりを進めている。
 (児童) わたしは、授業では、自分の考えを伝え合ったり、学び合ったりしている。

	A	B	C	D	E
保護者	19.1%	60.3%	7.5%	0.3%	12.8%
児童	21.9%	44.7%	9.9%	6.1%	17.4%



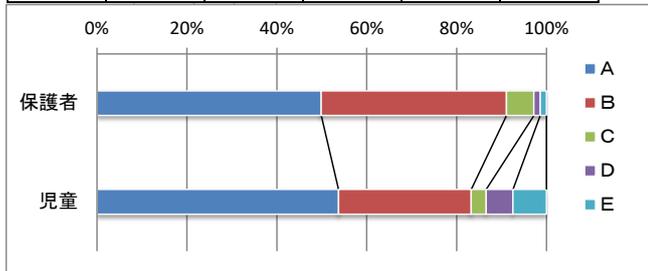
肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において79.4%と一定の評価が得られており、学校の取組が家庭からも概ね理解されていることがうかがえる。

一方、児童の肯定的意見は66.6%と、他の項目と比較しても低い水準となっており、保護者との間に認識の差が見られる。児童の回答では、C～Eが約33%を占めることから、「自分の考えを伝え合ったり、学び合ったりしている」と実感できていない児童が一定数存在することが明らかとなった。学年が上がるにつれて、自分の考えを言語化する力や他者の考えを踏まえて発言する力が求められるため、発言への不安や難しさを感じている児童が増えている可能性が考えられる。

これらの結果から、ICT機器や協働的な学習の形は一定程度定着しているものの、すべての児童が主体的に関わり、学び合いのよさを実感できているとはいき切れない状況がうかがえる。今後は、発言の仕方や考えの伝え方について段階的に支援するとともに、小集団での対話やICTを活用した意見共有など、参加しやすい学習形態を工夫していくことが重要である。また、学び合いによる理解の深まりを振り返りの場で可視化し、児童が成長を実感できるようにすることが、主体的な学びの定着につながると考えられる。

8 (保護者) 子どもは、体育の授業や体を動かす活動に楽しく取り組んでいる。
 (児童) わたしは、体育の授業や体を動かす活動に楽しく取り組んでいる。

	A	B	C	D	E
保護者	49.9%	41.2%	6.1%	1.4%	1.4%
児童	53.7%	29.5%	3.3%	6.0%	7.5%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者が91.1%と高く、体育授業や各種体育的活動が、子どもたちの体力向上や運動への意欲につながっていると受け止められていることが分かる。児童においても83.3%が肯定的に回答しており、多くの児童が体育や運動に前向きに取り組んでいる様子がうかがえる。

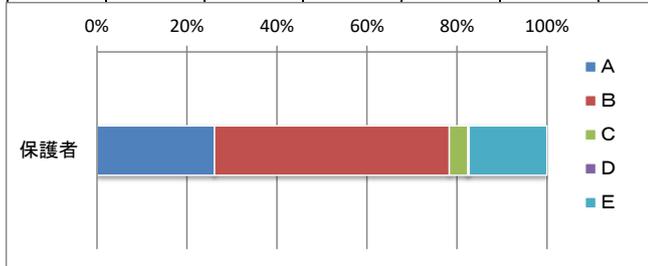
一方で、児童の回答ではC～Eが合わせて16.8%見られ、運動に対して苦手意識や不安を感じている児童が一定数存在することが明らかとなった。特に、中高学年においてはC～Eの割合が低学年よりも高く、技能差の拡大や体力差の自覚が、楽しさの実感に影響している可能性が考えられる。

学年別に見ると、低学年ではA・Bの割合が非常に高く、体を動かすことそのものを楽しんでいる児童が多い。一方、中高学年ではC～Eの回答が増加しており、運動への意欲や楽しさを維持するための配慮がより一層求められる状況がうかがえる。

今後は、引き続き体育授業や体育的活動の充実を図るとともに、技能の優秀に偏らず、誰もが達成感を味わえる学習内容や評価の工夫が重要である。また、個々の体力差や特性に応じた声かけや支援を行い、運動に対する自己肯定感を高めることで、生涯にわたって運動に親しむ態度の育成につなげていきたい。

9 (保護者) 学校は、通級指導教室やスクールカウンセラー、特別支援教育コーディネーター等を活用して、子ども一人一人を大切にした指導や支援の充実に努めている。

	A	B	C	D	E
保護者	26.1%	52.2%	4.1%	0.3%	17.3%



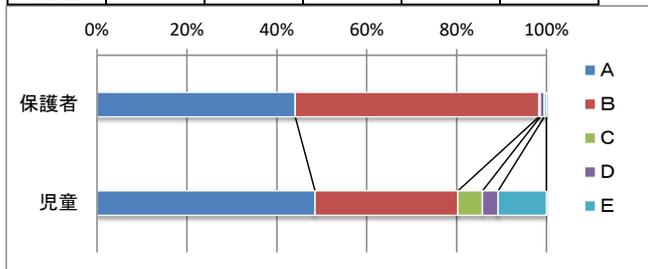
肯定的意見(A・B)の割合は、保護者の肯定的意見は78.3%と一定の評価が得られているものの、Eが17.3%と比較的高い割合を占めている点が課題として挙げられる。これは、支援の必要性や内容が家庭に十分に伝わっていない場合や、支援体制の存在自体を実感しにくい保護者が一定数いることを示唆している。

本項目は児童による回答を求めているため、学校側の取組がどの程度児童の安心感や学校生活の安定につながっているかについては、間接的に捉える必要がある。そのため、保護者との情報共有や相談の機会を通して、支援の目的や成果を丁寧に伝えていくことが重要である。

今後は、現在の支援体制を引き続き充実させるとともに、通級指導や相談体制の役割、活用の流れについて、保護者に分かりやすく周知していくことが求められる。また、早期発見・早期支援の視点を大切にしながら、家庭と連携した切れ目のない支援を進め、すべての子どもが安心して学べる教育環境の整備を一層推進していきたい。

10 (保護者) 子どもを安心して学校に通わせることができる。
 (児童) わたしは、学校で楽しくすごしている。

	A	B	C	D	E
保護者	44.1%	54.2%	0.3%	0.9%	0.5%
児童	48.5%	31.8%	5.5%	3.5%	10.8%



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者が98.3%と非常に高く、学校全体として、子どもが安心して学校生活を送ることができる環境づくりに努めていることが、高く評価されていることが分かる。学級・学年・学校が連携した取組が、保護者の安心感にもつながっていると考えられる。

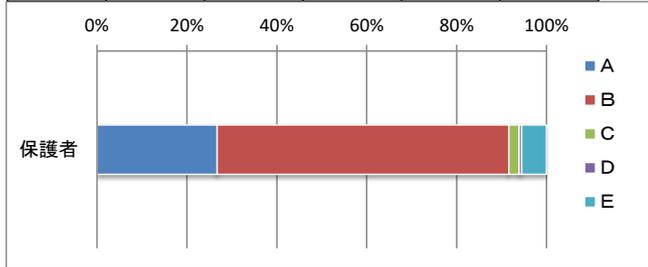
一方、児童の肯定的意見は80.3%と、多くの児童が「学校で楽しく過ごしている」と感じているものの、保護者と比較するとやや低い結果となった。児童の回答では、C～Eが約20%見られ、特にEが10.8%と一定数存在していることから、学校生活に対して不安や楽しさを十分に実感できていない児童がいることがうかがえる。

学年別に見ると、低学年に比べて中高学年ではC～Eの割合が高くなっており、人間関係の広がりや学校生活の変化に伴い、悩みや不安を感じやすくなる傾向が影響している可能性が考えられる。

今後は、これまでの取組を継続するとともに、児童一人一人の声や小さな変化を丁寧に捉え、早期に支援につなげる体制を一層充実させていくことが重要である。また、児童が「楽しい」「安心できる」と実感できる場面を意図的に増やし、学級活動や学校行事等を通して自己肯定感や所属感を高めることで、すべての児童が安心して過ごせる学校づくりをさらに推進していきたい。

11 (保護者) 学校は、交通安全や不審者対応・災害時対応等、安全指導の充実に努めている。

	A	B	C	D	E
保護者	26.7%	64.9%	2.3%	0.6%	5.5%

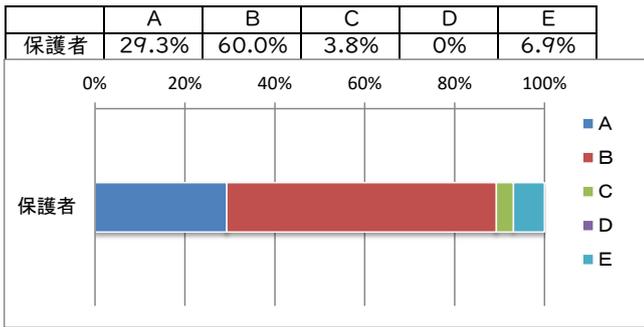


肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において肯定的意見が91.6%と高く、学校が子どもたちの安全確保に努めていることに対し、概ね信頼が寄せられていることが分かる。一方で、Eが5.5%見られることから、安全指導の内容や取組の様子が、家庭に十分に伝わっていないと感じている保護者が一部存在することも示唆される。

本項目は児童による直接的な評価は行っていないため、安全指導の成果については、児童の行動の変化や意識の高まりといった側面から継続的に把握していく必要がある。

今後は、これまでの安全指導を継続・充実させるとともに、訓練や指導のねらい、実施状況、成果について、学校だよりやホームページ等を通して、より分かりやすく保護者に発信していくことが重要である。また、家庭や地域と連携し、学校内外を通じた安全意識の向上を図ることで、子どもたちが安心して生活できる環境づくりを一層推進していきたい。

12(保護者) 学校は、地域の教材や人材を活用したり、地域関係団体と連携したりしながら、地域とともに子どもを育てる教育活動を推進している。

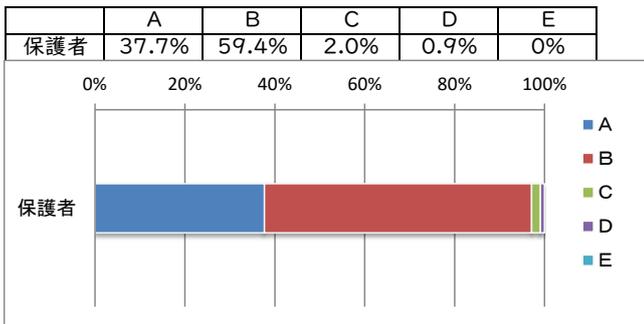


肯定的意見(A・B)の割合は、保護者において肯定的意見は89.3%と高く、学校が地域と協力しながら子どもを育てていることについて、概ね理解と評価が得られている。一方で、Eが6.9%見られることから、具体的な取組内容や成果が、すべての保護者に十分伝わっているとは言えない状況も示唆される。

本項目は児童による評価を求めているため、地域との関わりが児童の学びや成長にどのようにつながっているかについては、今後も活動の振り返りや成果を通して捉えていく必要がある。

今後は、地域の教育資源や人材の活用をさらに充実させるとともに、そのねらいや学びの成果を、学校だよりや行事報告等を通して分かりやすく発信していくことが重要である。地域とのつながりの中で育まれる学びの価値を共有することで、家庭・地域・学校が一体となった教育活動を一層推進していきたい。

13(保護者) 学校は、授業参観や学校行事、学校だよりやホームページ、すぐーる等を通じて、学校や子どもの様子等を伝える機会を設けている。



肯定的意見(A・B)の割合は、保護者が97.1%と非常に高い評価となった。学校からの情報発信が、頻度や内容の面で概ね適切に行われており、保護者が学校や子どもの様子を把握できていることがうかがえる。

紙媒体とICTを併用した多様な情報提供の手段が、保護者のニーズに応じた情報取得につながっていると考えられる。

一方で、C・Dの回答が少数ながら見られることから、情報量やタイミング、内容の分かりやすさについて、さらに工夫の余地があることも示唆される。特に、行事のねらいや教育的意義、子どもたちの成長の様子をより具体的に伝えることが、学校理解の一層の深化につながると考えられる。

今後は、現在の情報発信の取組を継続するとともに、より伝わりやすい工夫を重ねていくことが重要である。家庭との双方向のコミュニケーションを大切にしながら、信頼関係の構築と学校教育への理解促進を一層図ってきたい。

本年度の児童・保護者によるアンケート結果から、本校の教育活動全体について多面的に振り返ることができた。

全体として、保護者の評価は多くの項目で高水準となっており、本校の教育方針や取組が、家庭から一定の理解と信頼を得ていることがうかがえる。

一方で、児童の評価は、保護者と比べてやや低い項目が複数見られた。特に、「すすんで学習している」「学び合いができて」「行事で目標をもって取り組んでいる」「学校生活が楽しい」といった主体性や自己肯定感に関わる項目では、肯定的回答が一定割合あるものの、C～Eの回答も無視できない状況であった。このことから、学校としての取組や環境整備が進んでいる一方で、児童一人一人が自分自身の成長や達成を十分に実感できていない場面があることが課題として浮かび上がった。また、多くの項目で共通して見られたのは、学年が上がるにつれて児童の自己評価が厳しくなる傾向である。中高学年では、学習内容や人間関係が複雑になることから、不安や難しさを感じやすくなり、自己評価に影響していると考えられる。

安全指導、特別支援教育、地域連携、情報発信といった学校運営面においては、保護者からも高い評価が得られているものの、一部には「取組の内容や成果が十分に伝わっていない」と感じている様子も見られた。今後は、教育活動の「実施」だけでなく、「伝え方」や「可視化」を一層工夫する必要性が示唆される。

以上のことから、本校の教育活動は全体として安定的に推進され、安心・安全な学校づくりや基礎的な生活・学習習慣の定着において成果を上げていると評価できる。

一方で、次年度に向けては、「児童が『できた』『分かった』『成長した』と実感できる場面を意図的に増やすこと」「主体的な学びや学び合いへの参加のしやすさを高めること」「家庭・地域に対し、取組のねらいや成果を分かりやすく発信すること」を重点として改善を図ることが求められる。

今後も、児童・保護者・教職員の声を大切にしながら、子ども一人一人が安心して学び、成長を実感できる学校づくりを、家庭・地域と連携して推進していきたい。

